

望岳山荘

いて

松本周辺の秋たけなわになると、私はよく深志高校時代の「とんぼ祭」のことを思い出す。今は、受験勉強のためなのか、夏休み明けに早々と終えてしまおうようだが、私たちにとっての「とんぼ祭」

は、校舎裏の丘のりんご畑が秋空のもと、枝もたわわに紅玉を乗らせたイメージとつねに重なっている。

深志の三年生のとき

に私は、「とんぼ祭」でゴーロア協会のフランク展をやった。女子部員を含むゴーロア協会のメンバーが徹夜の

連続で準備したのだが、手許に残っている生徒会誌「校友」第四号(昭和三十年一月)

に私自身が記している文章によって当時の模様を再現すると、このようであった。

——トンボ祭。凱旋門をくぐれば、甘いシャンソンのメロディの中に、「ナポレオンについて」「オルレ

アの少女」「ジャンヌ・ダルク」「ゴーロア精神とは」「神々の愛

でし人々」「ラムポー、ガウス、ラディゲ」「フランク展」の特色とその欠点「結晶作用について」「スタンダールの恋愛論」「パリ案内」

ド」「フランス映画について」……など、これがゴーロワのフランク展だ——

そして、ゴーロアという名称の由来については、「現在のフランス人達、彼等の祖先がこのゴーロアなのである。ゴール人即ちゴ

ール(Gaulois)だ。……勇猛で情熱的で、好戦的であり、美しい

伝説とロマンスをもっていたのが彼等である。実にこのゴール魂

こそが今日のフランスをして世界文化の中心ならしめ……」などと書いてある。

ゴーロア協会のこと

実は、このゴーロア協会は、私が深志三年のときに、フランス文化とフランス語を学ぶためのサークルとして

仲間たちと創立したのであるが、当時、正課としてあったフランス語の教師で大変にダン

ディだった並木康彦先生(のち中大教授、昨年三月に御逝去)からの感化も大きかった。

私たちは「とんぼ祭」で右のような展示をしたり、『シャンソン

(Chansons de France)』という小冊子を発行して蟻ヶ崎高校の女生徒に人気を得

たり、よく授業をエスケープしては前庭の芝生や城山でシャンソンを歌ったりもした。パリのオペラ座とセーヌ河の絵を私が描いたゴーロア協会創立に際しての部員募集のポスターも残っている。この十一月下旬に

発行される私の絵入り随筆集『リヴォフのオペラ座』(文藝春秋刊)の表紙には、このポスターの絵の一部を使うことになっている。

ところで、伝え聞へるところによれば、このサークルは現在でも深志高校に存続しているけれど、名称がいつの間にかゴーロア会になっ

てしまっているという。だとすれば後輩諸君「是非ゴーロア協会に戻してくれたまえ。それはあくまでもゴーロア協会(a societe gauloise)でなければならぬ。なぜなら、私たちのサークルは、その創立に関し、様々な議論を重ねた末に、たんなる文化サークルではなく、あくまでも結社(societe)もしくはassociation)なのだ」と取ったものだったからである。

もっとも、数えてみると、それはもう三十七年以上も昔のことになっていくけれど…… (中嶋禎雄・東京外大教授)